

スキタイ式轡の系譜

山 本 忠 尚

【要約】 ザカフカスからドニエプル河流域に至るスキタイの領域より出土した青銅製・鉄製轡をスキタイ式轡と呼び、その型式分類を行った。銜を五型式、鏃を八型式に分類し、各々の変化の方向をたどると、銜・鏃に見られる型式の相違は時間の経過に伴うものであることが理解できた。さらに、銜と鏃とが組み合った轡として捉えてみても同様な状況を示した。そこで、銜を基準に編年してみると、IおよびII A・II B型式がプレスキタイ期(前九〜七世紀)、III型式がスキタイ文化初期(前六世紀)、IV型式が同中期(前五〜四世紀)に属し、各時期毎に伴出する斧・剣・鏃・土器・動物意匠などの遺物も型式を変えていること、つまり轡は他の遺物とセット関係を有して変化したことがあとづけられた。

右の事実を、スキタイ文化成立の事情とその変化のあり方を物語っているばかりでない。タガール・オールドス等東方の諸文化においては、轡をはじめとするスキタイ文化初期の型式をもった遺物がセット関係を示して出現しており、これら諸文化の成因にはスキタイ文化の強大な影響のあったことを示唆している。

史林 五五巻五号 一九七二年九月

はじめに

轡は馬具の一種で、馬の口にはませ、手綱をつけて馬を制御するのに用いる。馬の口中にはいる棒状の部分に銜、銜の両端にくみあわせて手綱をむすびとめる棒状部を引手、おなじく銜の両端にとりつけて轡を面繫につなぐ用と装飾とをかねるものを鏡板あるいは鏃という。銜は、一本の棒状になった型式(一枝式)と、中央でくみあわされた二本の棒からなる型式(二枝式)と、三本からなり中央にそろばん玉形の突出物をもつ型式(三枝式)の三種に大別できる。ルリスタン

青銅製の銜が一枝式であるほかは、たいてい二枝式が用いられたが、中国の漢代では青銅製の三枝式が採用された。^①

轡はトリポリエC文化（紀元前二千年紀前半）に発明されたという。これは角製の三孔をもった棒状の鏢を用いたものであった。^② 前15世紀頃からは青銅製の鏢が使用されるようになり、それらには、車輪形・方形板状・動物形をかたどった板状のもの、三孔をもった棒状のものがあつた。青銅製や骨製の鏢は、銜が鉄器化した初期鉄器時代になつても、しばらく鉄製の鏢と併存した。

クバン河流域を中心とする北カフカス地方からドニエール河流域に至るステップ地帯および森林ステップ地帯において発見された轡は、二枝式の銜と棒状の鏢とをくみあわせたものである。これらは主としてスキタイ民族の製作・使用にかかるものであるゆえスキタイ式轡とよぶ。イエスセン（Несен, A. A.）はプレスキタイ期（前8〜7世紀）およびスキタイ文化初期（前6世紀）に属するスキタイ式轡を集成し、型式分類を行った。^③ 以前のスキタイ式轡に関する研究のすべてが鏢を基本とした型式分類を行ってきたの^④に対し、イエスセンの行ったものは銜を中心としている。これは単なる型式分類に終らず、編年体系を伴つたもので、スキタイ文化の基本的要素である馬具の系譜関係の樹立に迫つた点で画期的なものであつた。

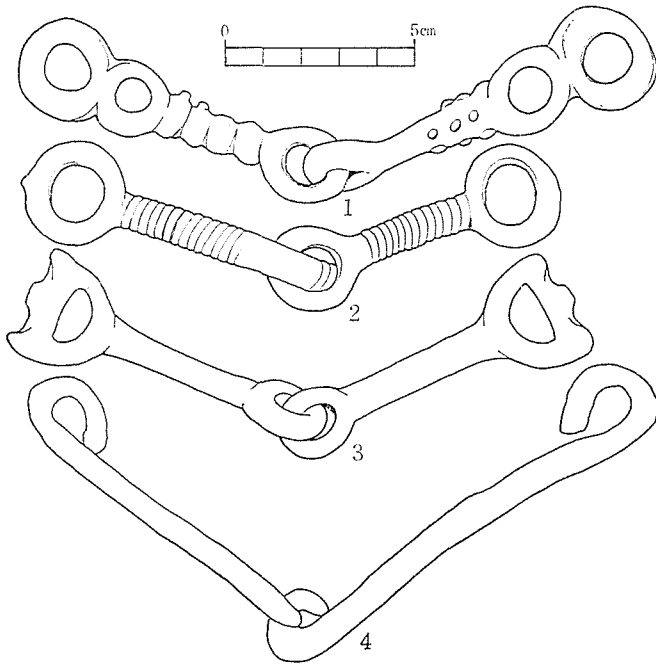
ここでは、イエスセンの集成した資料に、スキタイ文化中期（前5〜4世紀）の轡を中心に若干の資料を追加して、スキタイ式轡の編年を試み、あわせて、先年スキタイ動物意匠を論じた際不十分だった点を補足したい。本論末尾に、集成した資料を表示した。

① 小林行雄「くつわ」（水野清一・小林行雄編『考古学辞典』一九五九）。

② 林巴奈夫「ひょう」(前出『考古学辞典』一九五九)。

③ Несен, A. A., "К Вопросу о Панмиксах VIII-VII BB. до н. э. на Юре Евпаторской Части СССР." *Современная археология*, XVIII, 1953.

④ Нестор, J., Галрус = Нолварт (Gallus, S. et Horvath, T.), Потратц (Pottatz, H.) および Нолвартц (Harkavita, J.) の型式分類による。表2に研究者毎の分類の差異を示した。



挿図1：轡の型式分類 (縮尺1/4)

轡の型式分類

スキタイ式轡の轡には青銅製・鉄製の二種があるが、青銅製品をその両端の鑣および引手に連なる部分の形状の違いによってI・IIA・IIB・IIIの四型式に分類する。鉄製轡は、青銅製のIII型式に一致するもの若干例を除き、ほぼ定型化したIV型式をとる。

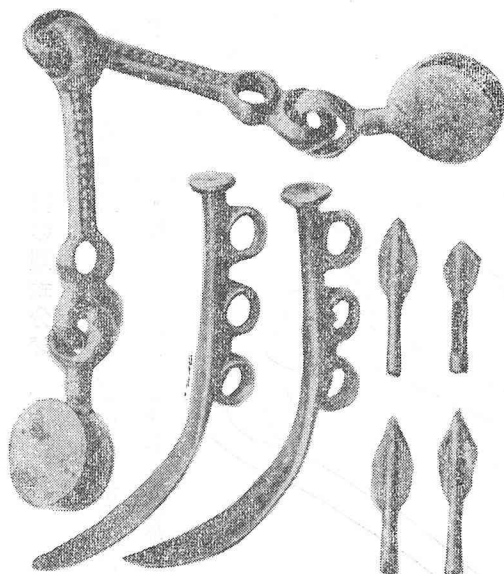
型式をとる。

I型式の轡はその両端部が相連続する二個の輪より成る(二輪式。挿図1の1)。外側の輪が比較的大きい。これは引手と連なるためのものである。内側のやや小さい輪は、後述するia型式の鑣についた三環の中央のものと結合するためのものである。引手は円盤状で(挿図2)、まれに矩形の棒状のもの(挿図3の1)、車輪状のもの(挿図3の2)がある。

II型式は両端部の輪が一つのものである(一輪式。挿図1の2)。

IIA型式とIIB型式とは同じ一輪式であり、轡自体の構造にはなんらかわらないのだが、IIA型式の轡は特殊な鑣を伴う。すなわち、ia型式ないしは

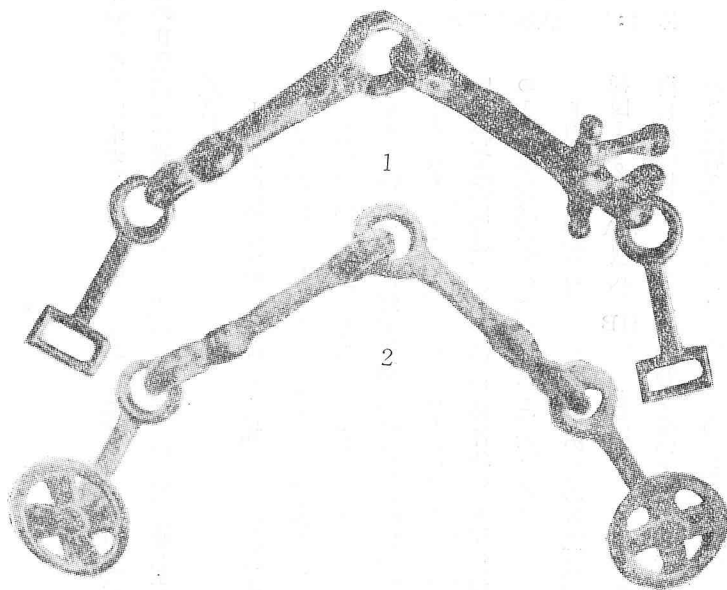
ii型式の鑣につくりつけられた三環の中央にあって轡と結合するものの逆側にもう一つ円環がついていて、これと引手が結合するようになっている(挿図



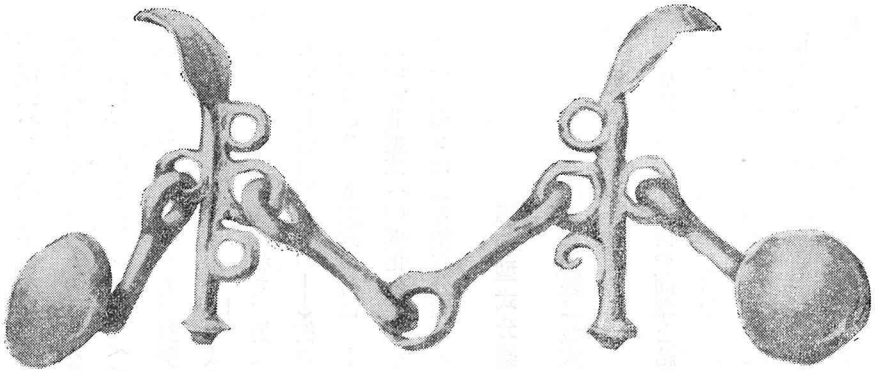
挿図2：チェルニッシェフ出土（資料14）

4 および挿図5の1）IIA型式では、I型式の銜における外側の輪が鑣へ置き換えられた形をとっているのである。ただし、鑣の向きが逆になって、三環のある方が外側になっているもの（挿図5の2）、および上下の面繋に結合する二環と、引手・銜に連なる環とが90角度を異にしているもの（挿図5の3）がある。IIB型式においては、引手と鑣とが共に一輪に連ならなければならないであらうと思われるが、その実例はない。引手はI型式と同様円盤状を呈する（挿図5の2）。

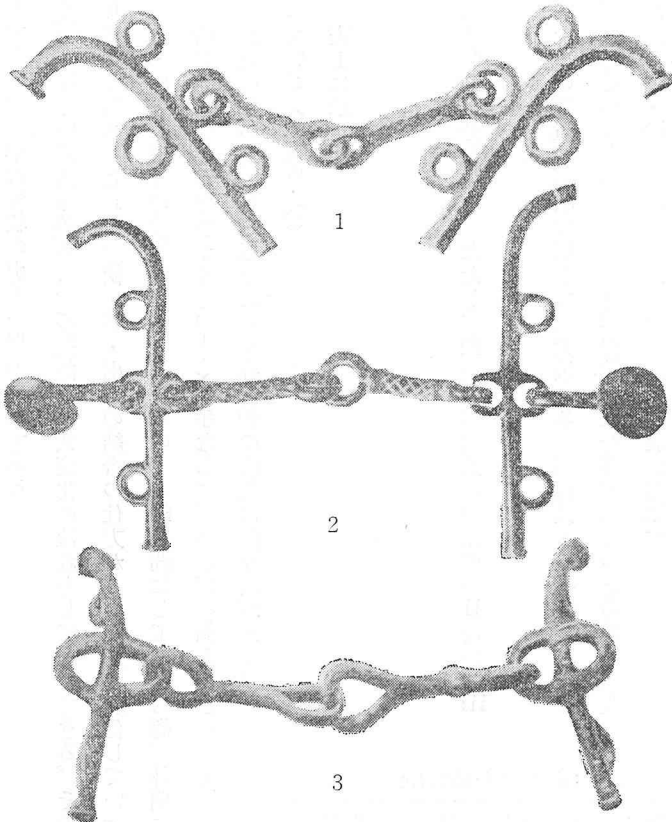
III型式の銜はII型式の輪の部分が鑣型になったものである（鑣式。挿図1の3）。これは鑣型部に、引手を付加することな



挿図3：1. キエフ地方出土（資料39） 2. コバン出土（資料23）



挿図4:コバン出土(資料62)



挿図5:1. コバン出土(資料63)
3. コバン出土(資料64)

2. ナルチック出土(資料65)

く、直接バンド状の手綱を結びつけるために生じた変化であると考えたい。Ⅲ型式の銜で引手を伴出した例はない。

Ⅳ型式は二本の棒各々の両端を折り曲げて環状とし、一端とおしを中央で結び合せ、他端に鑣・引手を装着したもの（折り曲げ式。挿図1の4）で、すべて鉄製である。簡単な輪状の引手を伴った例がある。

以上の五型式の銜のうち、鉄製のⅣ型式を除く四型式の差異は、系統的な型式変化の流れとして理解できる。その方向は、Ⅰ型式→ⅡA型式→ⅡB型式→Ⅲ型式である。これは、銜・鑣・引手の結合の仕方がこの順序で変化していったことを示している。すなわち、銜に対して鑣・引手が別々の箇所装着されるもの→鑣を間にして内側に銜、外側に引手がそれぞれ結合するもの→銜の同じ箇所鑣・引手が結びつくもの→引手なしに手綱が直接銜と結びつくもの、という変化である。Ⅱ型式の銜に、Ⅰ型式の内側の輪の名残りと思われる小孔を輪の内側に伴う例があり、Ⅰ型式からⅡ型式への変化の存在を物語っている（資料67・72）。

イェスセンによる型式分類との相違を表1に示した。

鑣の型式分類

鑣は青銅製六型式、鉄製二型式、および骨製に分類する。ただし、鉄製の二型式は青銅製のiiないしiii型式およびⅤ型式に類似する。

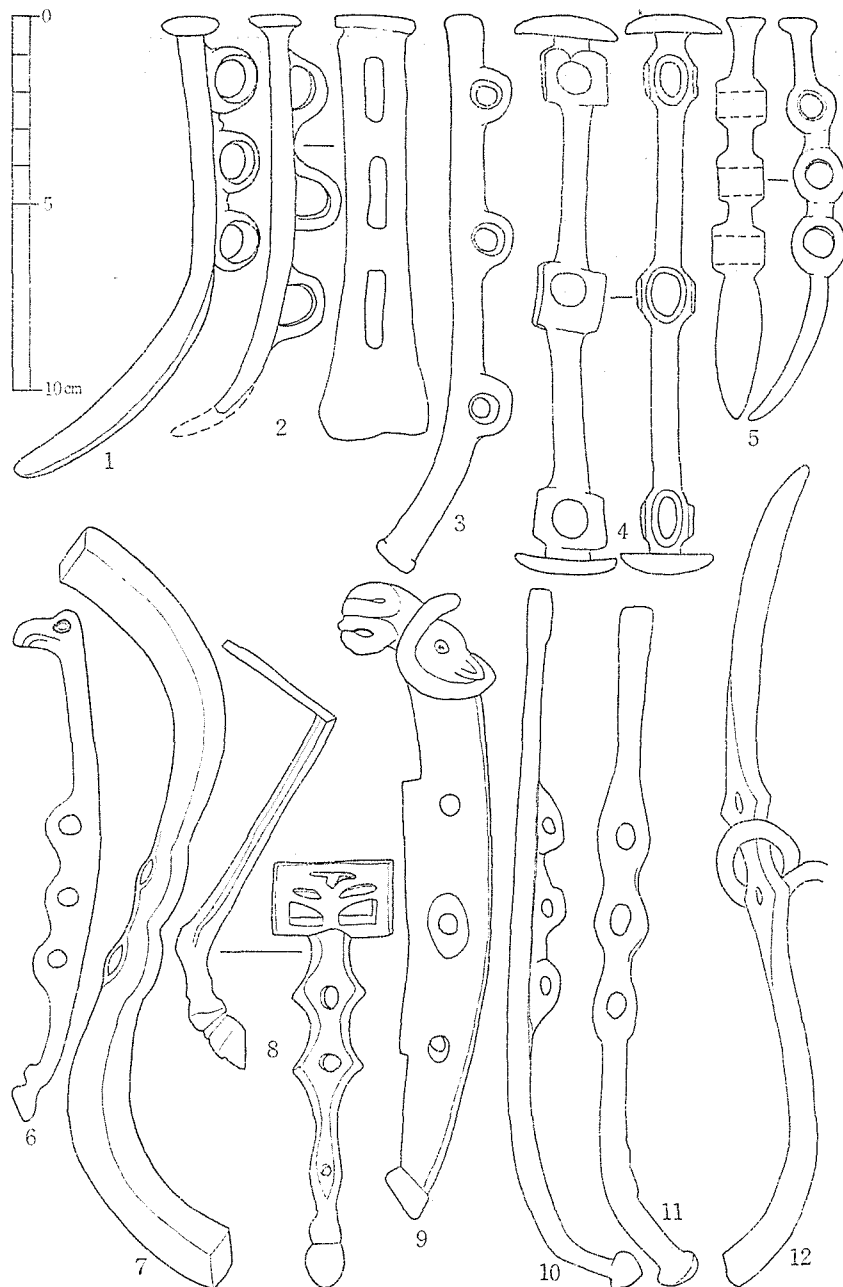
青銅製鑣を、まず銜や面繫と結合するための装置の形状に応じて三大別する。三環式・三孔式・および二孔式である。環と孔とに分つのは、鑣に環をつくりつけたものと鑣自体に孔を穿ったものとの差を重視するからである。ia・ib・ii型式は三環式、iii・iv型式は三孔式、Ⅴ型式は二孔式に属する。

ia型式は上半部が断面円形の棒状を呈し、下半部が平たくシヤベル状になったもので、上半内側に三環がつく。三環のうち中央のものは銜と連結し、上下二環には面繫が結びつく。下半は上半に対してゆるや

表1：銜の型式分類の対比

山本 1972	I	II A	II B	III	III (鉄)	IV
Мещен 1953	I	II A	II	III		

スキタイ式耜の系譜 (山本)



挿図6: 耜の型式分類 (縮尺塚)

かな角度をもつ。上端に円盤状の付加物がある(挿図6の1)。

ii型式は全体が板状で下方にむかうにしたがって裾ひろがりになる。下半はゆるやかに外彎している。内面に三環がつくりつけられているが、ia型式のように上半に集中することはない(挿図6の2)。

iii型式は棒状の鏢で下端がやや外彎する。環は前二型式に比して小さく、しかも鏢本体と同時に製作になるもので、三孔式との中間形態と考える(挿図6の3)。

iv型式も棒状の鏢である。三孔をもつ。孔の位置は一定でない。孔の周囲が肥厚したものの(挿図6の4)、そうでないもの(挿図7)、下半部がシャベル状に平坦になり反ったもの(挿図6の5)などさまざまなヴァリエーションがある。

v型式は中央が板状で巾広く、三孔はここに集中している。上下は棒状で、上端部に鳥頭形の装飾をもつ。弧状に彎曲している(挿図6の6)。

vi型式は中央部に二孔をもったもので、孔と孔との間が細くすばまっており、iv型式の銜に抱かれ易くなっている。S字状に屈曲したもの(挿図6の7)が多いが、L字状に極端に曲がったものもある(挿図6の8)。中には動物意匠を装飾とするものもあり、細別することができるが、ここでは、他が三環ないし三孔をもつのに対して、二孔しかもたない点を重視するに止め、一括して扱う。

鉄製の鏢はほぼ定型化している。棒状で、中央部に集中して三環ないし三孔または二孔をもつ。三環ないし三孔を有するものをvi型式とする。三環のもの(挿図6の10)は青銅製のii型式に、また三孔のもの(挿図6の11)は同じくiii型式に類似する。しかし、環であるか孔とすべきかの判断に苦しむものが多いため同一型式として扱う。二孔を有するもの(挿図6の12)をvii型式と呼ぶ。青銅製のv型式のうち、S字状にカーウしているものと類似する。

骨製の鏢は中央部がやや巾広く両端のすばまった凸レンズのような形状を呈し、巾広の中央部に三孔をもつ。中央の孔が他と比してやや大きい。上端に獣頭ないし鳥頭形の彫刻を施して装飾としている(挿図6の9)。

鑣における環と孔との差は、形態ばかりでなく、製作技法と機能の面にも及ぶ。環は細い棒を丸く折り曲げ鑣本体に接合したもので、別誂えである。直角方向から引く力に弱い。この点を鑑みて、銜に鑣を結合する場合、直接環を接続するのではなく、紐状のものを環を通して鑣本体に巻きつけ、環は単に紐がづれないような機能をはたしていたと考えたい。

IIA 型式の銜では輪と鑣の環とがかならず組みあわせているが、I 型式の銜で鑣と結合したまま出土した例が皆無であるところから推察するのである。これに対して、孔は鑣に直接穿つたもので、どの方向からかかった力に対しても強い。孔に比して環がより原初的であったと考えるのが自然であろう。三環式のうちでも、ii 型式の環は鑣本体と同時に作られたもので、引く力に対しては比較的強靱である。ii 型式は ia・ib 型式よりも新しい型であろう。また、環の場合、特に大きな ia・ib 両型式においては、銜の内側の輪に挿入するには大き過ぎ、輪の外側に出して連結せねばならぬであろう。一方、孔の場合は、輪ないし錠型の空間に入り得るだけ細い。この場合は、銜との結合はそれ程ぎつぐなくとも済み、上下のずれにさえ注意をばらえればよい。iv 型式の銜と v または vii 型式の鑣との組みあわせにおいては、銜端の折れ曲つた部分が鑣中央のくびれ部を抱きかかえた形になっており、銜と結合するための孔が不必要となり二孔に減じている。

以上の点から、鑣にも段階的な型式変化の存在を想定したい。それは三環式→三孔式→二孔式であつたろう。さらに、三環式においては ia・ib 型式から ii 型式への変化が想定できる。iv 型式は特異な変化型式であつて、iii 型式にほぼ併行していたと考える。鉄製鑣においても、三孔(環)式の vi 型式から二孔式 vii 型式へと変化していったであろう。

イエスセン以前に行われた鑣の型式分類との差異を表 2 に示した。

銜と鑣との組みあわせ

さて、右の型式分類に対応させて、集めたスキタイ式轡を順番に配列してみた(本論末尾、スキタイ式轡資料)。さらに、そのうちで銜と鑣との組みあわせのはっきりしたものを銜を中心にまとめたものが表 3 である。

表2：鏝の型式分類の対比

山 本 1972	ia	ib	ii	iii		iv	v	vi	vii	骨
Несен 1953	I	I A	II	III		IV	V	鉄		骨
HARMATTA 1948	IV		III	I・K	II					
POTRATZ 1940	IV			I	II					
GALLUS 1939				I・II・III						
HORVATH				I	II					
NESTOR 1934				I	II					

表3：銜と鏝の組みあわせ

銜の型式		伴出した鏝の型式		背 銅 製					鉄 製		骨 製	鏝 なし	計
		三 環 式			三 孔 式		二孔式	三孔式	二孔式				
		ia	ib	ii	iii	iv	v	vi	vii				
青 銅 製	I (二輪式)	26			1							29	56
	II A (一輪式にし て特殊な鏝)	1		3									4
	II B (一輪式)		3	3	1						2	2	9
	III (鏝 式)			2	12	1			12		2	41	70
鉄 製	III (鏝 式)								2			2	4
	IV (折り曲げ式)					1	3	9	22	7			42

表3において明らかに認められるのは、第一に、銜ではIII型式が最も多く、ついでIならびにIV型式がつづき、II型式は至って少数なことである。つぎに、I・III・IV各型式の銜と組みあわせる鏝をみると、I型式についてはia型式が圧倒的に多く、またIII型式については、青銅製のiii型式および鉄製のvi型式、つまり三孔式が多数を占めている。さらにIV型式に組みあわせる鏝ではvii型式が多いことに気づく。すなわち、銜と鏝との組み合わせの上から、スキタイ式響の主流はI型式の銜+ia型式の鏝、III型式の銜+iiiまたはvi型式の鏝、IV型式の銜+vii型式の鏝の三種であったことが知られる。これら三種の組み合わせを言い換えると、二輪式銜+三環式鏝、鏝式銜+三孔式鏝、および折り曲げ式銜+二孔式鏝である。ここに見た銜と鏝との組み合わせは、銜および鏝について別々に想定した各々の型式変化の方向と一致している。つまり、古い銜の型式Iに古い鏝ia型式が組みあわさり、新しいIII型式の銜には新しいiii型式の鏝が組みあわさっているのである。

また、表3から、出土数は少ないながらも、IIA型式の銜

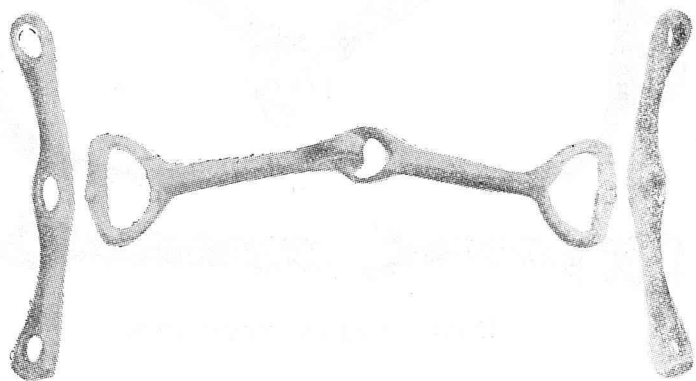
には ii 型式の鑣と共に ia 型式の鑣が組みあわさる例があり、一方、IIB 型式には ii 型式と共に ia および iii 型式の鑣が組みあわさっておったことが知られる。

IIA・IIB 両型式が I と III 両型式の中間に位置し、しかも IIA が IIB に先行するとした見解は、組みあう鑣においても同様な状況を示しており、支持できるであろう。

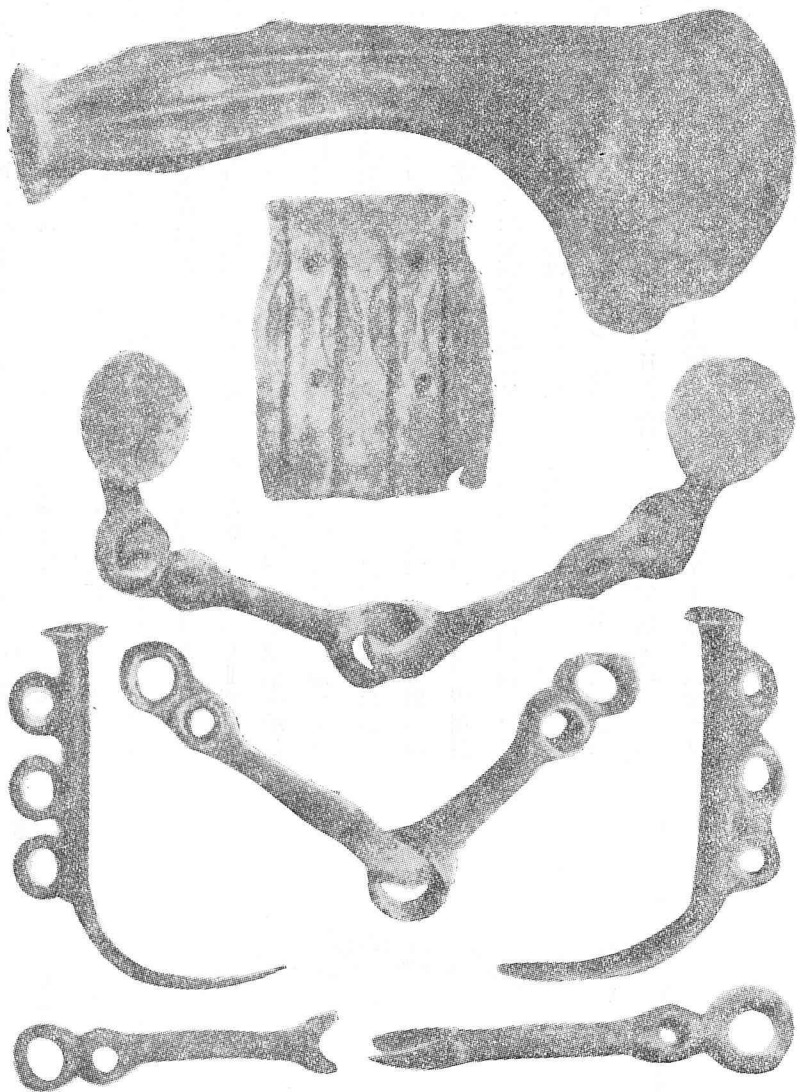
III 型式の銜には、ごく少数であるが、鉄製品が含まれている。また、III 型式の銜に伴う鑣の材質は青銅と鉄が半ばしている。これは I ないし II 型式の銜においては見られなかった現象で、轡が鉄器化してゆく過渡期の様相を示している。ところが、IV 型式の銜はすべて鉄製で、青銅製や骨製の鑣を伴う例があるとは言え、ほぼ鉄器化が完了した時期のものであると言えよう。したがって、銜においては鉄製の IV 型式が他の諸型式より後出し、鑣においても鉄製の vi・vii 両型式が i~v 諸型式よりも新しいものであると考える。ただ、青銅製の極端に装飾化した動物意匠を冠する鑣 (v 型式の一部) は比較的時期の下るものである。これらには特殊な用途の存在を考えたい。

さて、銜と鑣とを組みあわせた轡としての型式変化の方向を設定しておこう。
 I 型式銜 + ia 型式鑣 → IIA 型式銜 + ia・ii 型式鑣 → IIB 型式銜 + ia・ii 型式鑣
 ↓ III 型式銜 + iii・vi 型式鑣 ↓ IV 型式銜 + vi 型式・骨製鑣 ↓ V 型式銜 + v
 ・ vii 型式鑣。

スキタイ式轡の編年



挿図 7: イズヨム出土 (資料80)



挿図8：ノーフォチェルカヌク遺宝（資料13）

以上、スキタイ式鐮の型式分類を行い、型式変化の方向を設定してみた。ここでは右の仮設に概略の年代観を加え、スキタイ式鐮の編年を試みる。

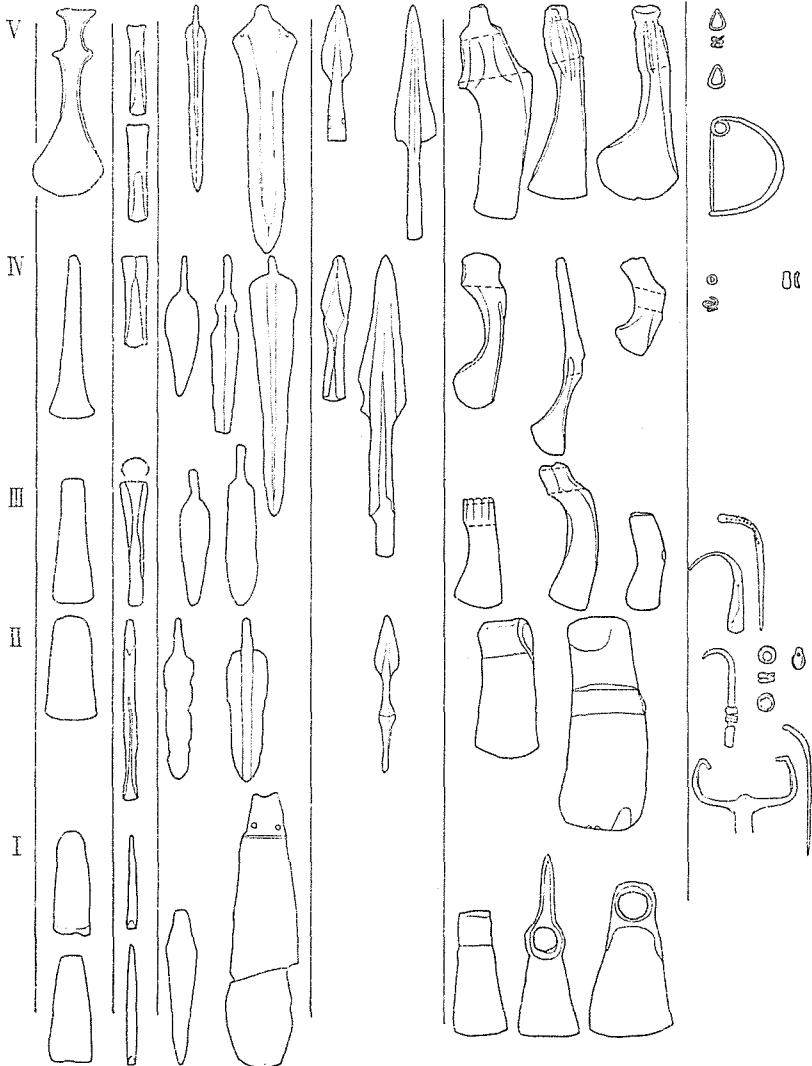
I型式の銜について、その実年代を語る好個の資料としてノーヴォチェルカスク遺宝(Новочеркасский Клад)がある。発見時における詳らかな状況は判らない。I型式の銜三点、ia型式の鐮一对の他に、青銅製の斧一、鍍の熔範一などが出土した(資料13。挿図8)。銜のうち一点は引手を伴っている。

また一点は中央部が擦り切れ、左右に分離している。斧の型式は北カフカスに広く分布しているコバン文化I期の鬮斧に類似している。ただ、作りが粗く重厚である上、中央のくびれを欠く。イェスセンは一種の変化型式で労働用の斧であろうとしている^①。同型の斧はコバン墓地第12号墓(資料24)、ザユコーヴォ12号墓(資料27)、カメノモトスキー第2号墓(資料22)、およびスルムシ(資料31。挿図9)で出土し、いずれもI型式の銜との共伴関係を示している。

コバン文化(Кобанская Култура)は北カフカスというよりむしろ中央カフカスにあたるオルジヨニキツェ(Орджоникидзе)付近の小村にちなんで命名された文化で、前11世紀より前4世紀にわたる。前9ないし前8世紀までをI期、前650年頃までをII期、それ以降をIII期として編年されている^②。問題の斧はI期に属するもので、遅くとも前8世紀と前7世紀の境よりは新しくないと言われ、イェスセンはノーヴォチェルカスク等の斧を前750〜650年に位置づけている^③。



挿図9：スルムシ出土 (資料31)



挿図10：ヤムナヤ文化青銅器の編年 (Meessen, 1950に拠る)

同型の斧は北カフカスのクバン (Kybans) 河流域でも出土しており、この地の大クルガンを編年したイエスセンはこれらを後期クバン文化 (クバン V 様式) に位置づけ、前 1000 ~ 700 年の年代を与えている (挿図 10)。

シャルダンシュティ (資料 48) より出土し I 型式の銜との共伴関係を示しているピン (挿図 11) もコバン I 期もしくはクバン V 様式に属するものである (挿図 10)。

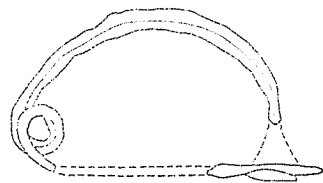
ノーヴォチェルカスク遺宝中の鍍烙範は、月桂樹葉型の青銅二翼鋸を製作するためのものである。茎の部分が著しく長い。この型の鋸はラウ (Lau, P.) の分類によると「プレスキタイ型」の中でも比較的古いものであり、前 700 年に下限があるとされている。^⑤

チェルニツェフ (資料 14)、レールモントフ (資料 5)、シンフェロポル (資料 15)、ブテンキ (資料 16) およびナサチュエヴォ (資料 19) でもプレスキタイ型の二翼鋸が I 型式の銜に伴って出土した。これらは、下半は月桂樹葉型を保って丸みを帯びているが、上半は鋭角三角形形状を呈し、直線的に尖っている (挿図 2)。ラウの分類によるプレスキタイ型鋸の一つのヴァリエーションにあたり、前 7 世紀に属せしめられている。ただし、ナサチュエヴォにおいては三翼鋸をも共伴しており、やや時期を下げて考える必要がある。また、カメノモストスク第 2 号墓出土の斧には他よりも遅れる様相が指摘されている。伴う鏃が、やや異形ではあるが、iii 型式であることと矛盾しない。^⑦

また、コンスタンティノーヴォ第 375 号墓 (資料 18) においては、I 型式の銜に伴って土器が出土している (挿図 12 の 1)。これはリビエロフ (Либеров, П. П.) により前 8 ~ 7 世紀に比定されている。^⑧

以上から、I 型式の銜は前 9 世紀ないし前 8 世紀に使用を開始し、前 7 世紀を通じて用いられていたと考えることができる。

II 型式の銜に関しては伴出遺物の存在を知らない。型式学的検討において I 型式と III 型式の中間に位置せしめたにとど

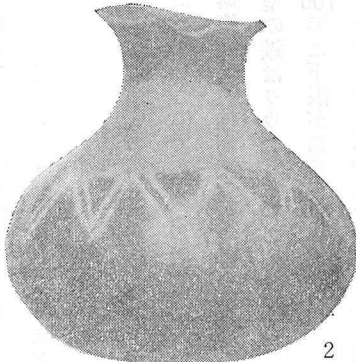
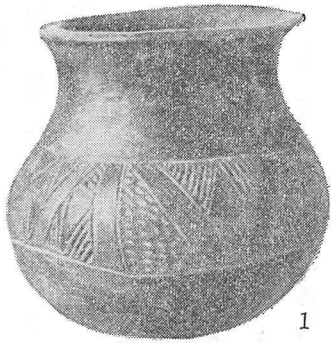


挿図 11：シャルダンシュティ出土 (資料 48)

めざるを得ない。引手の形状にI型式のそれと一致するものがあることから(資料67・72。挿図5の2)、I型式とさほどへだたらない時期に想定しておく。

Ⅲ型式の銜は、組みあわさる銜の違いによって二分することができる。すなわち、**iii**型式の銜と組みあわさるものと、**vi**型式の銜と組みあわさるものである。**iii**型式とセットをなすグループのうち、カミシエヴァフ(資料79)およびボルシヨイペロゼルカ(資料81)などはブレスキタイ型の二翼銜を伴っている。しかし、ザボティン524号墓(資料83)、スタルシャーヤ墓地1号墓(資料84)、エミチユカカ375号墓(資料85)などでは**iv**型式の銜と組みあわさるものと同じ遺物のセット関係を示しており、両グループに年代差を考えることはできない。

さて、Ⅲ型式の銜のうちには、ケレルメス(資料89・90)、ウリスキーアウル(資料90)、コストロムスカヤ(資料88)という、前6世紀初頭(ラウのいう「初期古拙時代」)に属するスキタイ文化初期の典型的要素を備えた墳墓よりの出土品がある。スキタイ文化初期の典型的要素というのは、第I型式の鹿意匠^⑨、古い形式のアキナケス式短剣^⑩、比較的茎の長い青銅製三翼銜の



挿図12： 1. コンスタンティノーヴォ
375号墓出土(資料18)
2. ボルシャイペロゼルカ出
土(資料81)

セットを指す。三翼銜に伴ってかえりの付いた二翼銜があるのもこの時期の特徴である。ケレルメス墳墓群は、年輪年代測定法の結果、前6世紀初頭の年代を与えられている^⑩。また、ケレルメス出土のアキナケス式短剣の黄金製鞘に打ち出された怪獣の尻に押されたN字形の刻印はウラルトウ美術と共通するもので、ケレルメスの年代は前7

世紀末にあがる可能性がある^⑭。やや広くとって、これら三墳墓の年代を前7世紀末葉から前6世紀前半にあてる。イリンスカーヤ(Mishkar, B. A.)^⑮も、前出三墳墓とはほぼ同じセット関係の遺物を有するヴォルコフツィ8号墓(資料35)、アクスユティンツィ2号墳(資料86)を前6世紀に比定している。先にプレスキタイ型の二翼鏃を出土したとして触れたボルシヨイペロゼルカ(資料81)では、土器も伴出しており(挿図12の2)、これはリビエロフにより前6世紀に比定されたものである^⑯。また、鉄製のⅢ型式銜を出土したアクスユティンツィ3号墓(資料126)、ルーキ(資料126)、ヴォルコフツィ495号墓(資料127)およびゲラシモフカ1号墓(資料128)もイリンスカーヤによって前6世紀に比定されている^⑰。

以上から、Ⅲ型式の銜は前7世紀末より前6世紀に属するとすることができよう。

Ⅳ型式の銜も、組みあわさる鏃の型式差によって二分することができる。すなわち、vi型式の鏃と組みあわさるグループとvii型式の鏃と組みあわさるものとである。前者は比較的茎の長い三翼鏃を伴い、同時に少数ながら二翼鏃をも伴い、やや遅れるとしても、ほぼⅢ型式の銜との併行関係が窺える。これに対して、後者は茎の短い三翼鏃を伴出し、部分的には三角鏃を伴うものもあり、時期がさがる。v型式の青銅製鏃と組みあわさる一群も、ほぼvii型式の場合と同様の伴出遺物を有する。逆に、骨製の鏃と組みあわさるものはvi型式と同様の状況を呈している。また、vi型式の鏃と同時に骨製鏃を伴出した例もいくつかある(資料131・135・137)。イリンスカーヤは、ヴォルコフツィ2・9・11・477・478号墓(資料131・153・137・154・144)、ポポフカ1・3・5・6・7号墓(資料132・138・133・134・139)、アクスユティンツィ2・467・468・469・470号墓(資料150・148・143・140)、バソフカ6号墓(資料151)を前6世紀、バソフカ497・499号墓(資料158・180)、バルズナ1号墓(資料159)、クレシエフカ452号墓(資料161)、ポポフカ号墓(資料162)、アクスユティンツィ1・1・2号墓(資料174・179・178)、キツィ(資料176)を前5世紀、ヴォルコフツィ1号墓(資料167)を前4世紀に比定している^⑱。

右の年代を採り、vi型式および骨製の鏃と組みあわさったⅣ型式の銜を前6世紀に、vおよびvii型式の鏃を伴うものを前5〜4世紀に考える。前群は三孔式、後群は二孔式の鏃と組みあわさった。

- ① Нессен, А. А., "К вопросу о Памятниках VIII-VII вв. до н. э. на Юге Европейской Части СССР", *Советская Археология*, XVIII, 1953.
- ② SULIMIRSKI, T., *Prehistoric Russia*, 1970.
- ③ 前掲 Нессен, 論文。
- ④ Нессен, А. А., "К хронологии Больших Кубанских Куранов", *Советская Археология*, XII, 1950.
- ⑤ RAU, P., *Die Gräber der Frühen Eisenzeit im Unteren Wolgagebiet*, 1929. 15 頁器物は発見しつゝなご。前掲 Нессен (1953) 論文の引用しつゝ。
- ⑥ 注5と同じ。
- ⑦ 前掲 Нессен (1953) 論文。
- ⑧ Либрова, П. Д., "Хронология Памятников Поднепровья Скифского Времени", *Вопросы Скифо-Сарматской Археологии*, 1952.
- ⑨ 山本忠尚「スキタイ動物意匠の起源と展開」(『古代学』第17巻第3号 一九七〇)。
- ⑩ 環頭で輪口がハート状を呈するもの。アキナケス式短剣については機会を改めて論ずるつもりである。
- ⑪ SULIMIRSKI, T., "Scythian Antiquities in Western Asia", *Artibus Asiae*, 17, 1954.
- ⑫ AZAROV, G., *Uralian Art and Artifacts*, 1968.
- ⑬ 1929 年以後の機会を捉へて論ずる所存である。
- ⑭ Ильинская, В. А., *Скифы, Днепровского Лесостепного Ледоберезья*, 1968.
- ⑮ 注8と同じ。
- ⑯ 注13と同じ。
- ⑰ 注13と同じ。

スキタイ式轡の分布と系譜

つぎに、銜の型式五種について、各々の出土地を北カフカス、ザカフカス、ドン・ドネツ河流域およびドニエープル河流域の四地域に分けて検討してみた。

その結果表 4 が得られた。この表から、I 型式は北カフカス、ドニエープル河流域に多く、ついでドン・ドネツ河流域にやや多いこと、IIA・IIB 型式は北カフカスのみから出土をみていること、III 型式は I 型式とほぼ同じ分布状況を示していること、そして IV 型式はドニエープル河流域に多く、ついでドン・ドネツ河流域からも若干出土していることが判る。

II 型式の銜は、北カフカスでもその南西部に偏る分布を示している。それらが未だ北カフカス以外の地から発見されていないということは、II 型式が I 型式から III 型式への変化の中間形態たる位置を占めているので、この一連の変化は、元来

表4：スキタイ式轡の分布

地域の型式		青銅製				鉄製	
		I	II A	II B	III	III	IV
北ザ ド ド	カフ	23	4	9	33		
	カフ	1					
	ドネット	10		8	10		
	ドニエール	22		28	4		
計		56	4	9	70	4	42

は北カフカスで生じ、その後ドニエール河流域へともたらされたと考えられるであろう。Ⅳ型式の銜はすべて鉄製であった。これに連なる鑣も鉄製がほとんどで、青銅製がなくても二孔式に限られると言ってよい。出土地ではドニエール河流域が多く、ドン・ドネット河流域にも若干例がある。また、Ⅲ型式にも少数ながら、鉄製品があった。これらはすべてドニエール河流域の出土である。Ⅲ型式の銜が行われた時期、多分その末期に、銜の鉄器化が生じ、やがてⅣ型式の鉄製銜として定型化していったと考えられる。出土地からみて、この鉄器化の現象が生じたのはドニエール河流域地方であつたろう。ここに、スキタイ式轡隆盛の中心地が北カフカスからドニエール河流域へ移動したことが示されている。

さて、右の検討の結果、次の如くスキタイ式轡の系譜をまとめることができよう。

前9世紀ないし前8世紀、青銅製の轡が北カフカス一帯に突然出現した。これらは黒海北岸のステップ地帯から導入されたものではない。なぜならば、それらの地域では金属製の轡は未だかつて発見されていないからである。それらの起源は西アジアにあつたと考えたい。しかし、北カフカスで発見された轡は西アジアで発見された轡とは型式を異にしている。前者は後者の地方的発展の産物であつたろう。

スリミルスキーによれば、木槲墳文化 (Срубная Культура) やアンドロノヴォ文化 (Андроновская Культура) 等のステップ地帯で用いられていた小さな馬の騎乗には、金属製の轡は不要であり、また逆に、西アジアにおける馬車用の育ちの良い馬にはそれが欠かせないものであつたといふ^①。当時、戦車を用いた地域からは多くの青銅製の轡が発見されており、また、西アジア型の青銅製轡が、前13～12世紀頃までにはザカフカス地方に導入されていたことはいくつかの遺物が物語っている^②。あまりへだたらぬ時期に、コバン文化さらにはクバン河流域地方に、ザカフカス方面から馬車の使用が伝わり、騎馬の風と共に存在したのであろう。

I型式の銜にia型式の鑣が組みあわさった最古の型式の青銅製鑣は、前8世紀に、北カフカスからクリミア半島、ドニエール河中流域およびドン河下流域まで拡まった。この原因は、ザカフカス地方にあったスキタイ民族の北方への進出にあったと思われる。スキタイのいくつかの部族がターマン半島からクリミア半島を経由して侵入、ドニエール河中流域に達したのである。ドニエール河下流域西方にあったサバティノフカ文化(Сабатиновская Культиура)の衰退、および中流域におけるチュルノリス文化(Толнолицо Культиура)の形成はこの民族移動の一環であった。これらの地域にカフカスタイプの武器・道具類が出現したことがこの事実を物語っている。しかし、在地の民族が全く亡び去ったわけではなく、文化伝統も継承された。スキタイ的特色によって覆いつくされるのは、スキタイ文化中期に至ってからである。^③

① Сулимски, Т., *Prehistoric Russia*, 1970.

② Фелменко, I. I. *Лохашен* の墳墓発見の馬車の青銅製模型、同じく

Diizhan 発見の粘土製容器に描かれた馬車の図、*Alhtala* 出土の青

銅製帯に描かれた馬車の図、およびダジェスタン *Berekey* 出土の

stela に描かれた馬車の図を指す。前掲 Сулимски (1970) 244。

鑣自類が出土しているわけではない。

③ 山本忠尚「スキタイ動物意匠の起源と展開」『古代学』第17巻第3

号、一九七〇。

む す び

I・II両型式の銜が、はるか東方イェニセイ河上流域のミシンスタ盆地において、タガール文化(Тарарская Культиура)前期に登場したことが知られている。^①スキタイ文化においてIII型式の銜が出現した時期よりも半世紀ほど遅れたと思われる。また、I・II両型式がほぼ同時に出現しており、スキタイのものと型式がほぼ一致すること考えあわせると、タガール文化の鑣はスキタイ式鑣の伝播によって生じたと解される。この状況は、動物意匠、三翼鑣、アキナケス式短剣の出現の状況と全く同一・同時であって、タガール文化に与えたスキタイ文化の影響の強さを雄弁に物語っている。また、さらに東方の中国内蒙古自治区の長城地帯においても、I型式に類似した二枝式の鑣の出土が報告されている。^②これにもスキタイ式鑣の影響が窺える。

先年、「スキタイ動物意匠の起源と展開」と題して、鹿意匠の型式分類・編年を行い、スキタイ動物意匠のザカフカス起源と東方への伝播を説いた。^③これに対して多くの批判を受けたが、中でも最も執拗であったのは、シベリアないスカザフスタン起源説を採る方々からのものであった。筆者の意図したところは、スキタイ動物意匠の起源と展開が、スキタイ民族の「騎馬民族化」という社会的現象と不可分に結びついた現象であったことを検証することにあつた。したがって、例えば、東カザフスタンのザイサン湖の近く、チリクティ墳墓群より黄金製の鹿意匠が出土したとて、それが他の遺物(武器・馬具類)とセット関係を示さない限り、スキタイ動物意匠の匠起源にとっては無視し得ると考えたのであり、他の起源説を否定せずともおのずからザカフカス起源が明瞭化すると判断したのであつた。他説を無視したとの批判に一言弁明しておく。

しかしながら、動物意匠のうち、鹿意匠という限られた資料を用いた関係で、スキタイ文化総体の展開を明らかにし得なかつた観がある。そこで、前記論文中で動物意匠と共にセット関係にあるとした武器・馬具類——それは騎馬民族に不可欠なものである——についても検討の要を感じた。本論では鬻を扱ったが、今後、鏃、アキナケス式短剣についても同様の検討を行つてゆくつもりである。前論文に対して御批判をいただいた方々に厚く感謝の意を表し、あわせて、再び御批判をお願いする次第である。

- ① Гринин, Ю. С. "Производство в Тараскью Шоуы", *Материалы и Исследования по Археологии СССР*, 90, 1960. 第一冊 一九三(五)。
- ② 水野清一・江上波夫「内蒙古・長城地帯」『東方考古学叢刊』乙種 号、一九七〇。 一九七二・五・二九
- ③ 山本忠尚「スキタイ動物意匠の起源と展開」『古代学』第17巻第3

追記 本論を書くにあたって、峰 巍氏よりロシア語に関する御教示をいただいた。校閲の勞をとってください

中村徹也氏とあわせ記し深く感謝の意を表したい。

スキタイ式嚮資料

番号	挿図	典 拠	嚮 の 型 式			出 土 地			発見者・年度	所 在 館 (博 物 館)	伴出遺物	
			銜	引手	鏃	地 方	河川・都市	遺 跡				
1		② 4-1	I		ia	北カフカス	Терек	Кобан	A. С. Уварова	Москва		
2		② 4-2	I		ia	北カフカス	Баксан			Эрмитаж		
3		② 6.6a	I ②	円盤 円盤 円盤	ia	北カフカス	Побкмок	Ессентуки	1934	Пятигорск		
4		① 12	I		ia	北カフカス	Побкмок	Лермонтов		1950	Пятигорск	
5		① 14	I		ia	北カフカス	Побкмок	Лермонтов	Бештау	1951	Пятигорск	銅鏃 4
6		② 7-1	I		ia	北カフカス	Кубань	Махочевск		1895	Эрмитаж	
7		②	I		ia	北カフカス	Берая	Майкоп		1906	Эрмитаж	
8		② 7-2	I		ia	北カフカス	Берая	Майкоп	К. Г. Козлов	1904	Москва	
9		②	I		ia	北カフカス	Берая	Майкоп			Berlin	
10		②	I		ia	北カフカス	Берая	Майкоп			Краснодар	
11		②	I		ia	北カフカス	Берая	Тульский	Н. Н. Ерамова		Москва	
12		② 2-1	I		ia	北カフカス		Геленджик			Грузна	
13	8	② 1	I ③	円盤	ia	ドン・ドネツ		Новочеркасск	1939	Новочеркасск	斧・鏃熔范	
14	2	② 10.3-1	I	円盤	ia	ドン・ドネツ		Чернышев	1887		銅鏃 4	
15		③ 1.2	I	円盤	ia	ドニエーブル		Симферополь			銅鏃 4	
16		③ 25.62	I	円盤	ia	ドニエーブル	Ворскла	Бутенки			銅鏃 1	
17		②	I	円盤	ia	ドニエーブル	Черкаскы	Залевки	Бобринский	1910	Киев	
18	12-1	② 11	I	円盤	ia	ドニエーブル	Черкаскы	Константиново 375	Бобринский	1901	Киев	土器 銅鏃
19		④ 1	I ③		ia	ドニエーブル		Насачево				
20		②	I		ia	ドニエーブル		Екатеринослава	A. Н. Поля		Днепропетровск	
21		② 9-2	I	円盤	ia	ドニエーブル	Киев		Скворцова	1909	Эрмитаж	
22		② 5	I		iii	北カフカス	Берая	Каменноостский 2	E. И. Крупнов		Москва	斧
23	3-2	② 4-3	I	車輪		北カフカス	Терек	Кобань			Москва	
24		②	I			北カフカス	Терек	Кобань 12	Chantre		Saint German	斧
25		②	I	円盤		北カフカス	Терек	Кобань			Saint German	

26		②	I	円盤	北カフカス	Побком	Пятигорск	Харьов	1902	В. Р. Апухтина	
27		⑤ 14	I		北カフカス	Баксан	Заково 12	Гриневиц	1949	(個人蔵)	
28		① 10	I		北カフカス	Кубань	Лабы		1930	Нальчик	斧
29		②	I		北カフカス					Краснодар	
30		②	I		北カフカス	Берая	Майкоп			Краснодар	
31	9	⑥	I		ザカフカス	Лечхуме	Сурми			Грузна	斧
32		②	I		ドニエーブル	Керчы				Эрмтаж	
33		② 9-1	I		ドン・ドネツ		Цимлянск		1896	Новочеркасск	
34		②	I		ドン・ドネツ		Казанская			Казанская	
35		②	I	円盤	ドン・ドネツ	Воронеж	Коротояк		1926	Воронеж	
36		②	I		ドン・ドネツ	Кагарлык	Самарское			Москва	
37		②	I		ドニエーブル	Черкасы	Мошны			Москва	
38		②	I		ドニエーブル	Черкасы				Эрмтаж	
39	3-1	② 9-3	I	矩形	ドニエーブル	Киев		Бобринский	1907	Киев	
40		②	I		ドニエーブル	Канев		Зносковорский		Киев	
41		②	I		ドニエーブル	Канев				Киев	
42		②	I		ドニエーブル	Канев		Ханенко		Киев	
43		②	I		ドニエーブル	Канев	Зеленки	Бранденбург	1895	Эрмтаж	
44		②	I		ドニエーブル	Смела	Упомянутое	Третьякова		Киев	
45		⑦ 6-19	I		ドニエーブル	Смела	Залевк 高城				
46		②	I		ドニエーブル	Звенигородск	Рыжановка	Самквасов	1890	Москва	
47	11	②	I		ドニエーブル		Тарасов 高城		1951	Киев	
48		⑧ 22-7	I		ドニエーブル	Днестр	Шолданшты				ピン
49		②	I		ドニエーブル			Жевахова		Днепропетровск	
50		②	I		ドニエーブル			Темницк		Киев	
51		②	I		ドニエーブル					Кировоград	
52		②	I	ia	ザカフカス	Душети				Москва	
53		②	I	ia	北カフカス	Черек	Балкарин			Нальчик	
54		②	I	ia	北カフカス	Кубан	Краснодар 高城			Краснодар	
55		②	I	ia	北カフカス	Астрахан	Кише			Москва	

番号	挿図	典 拠	轡 の 型 式			出 土 地			発見者・年度	所 在 館 (博 物 館)	伴出遺物
			銜	引手	鑣	地 方	河 川・都 市	遺 跡			
56		②			ia	北カフカス		Абрау-Дюрсо		Новороссийск	
57		②			ia	北カフカス			1928	Ставропол	
58		② 9-4			ia	ドン・ドネツ		Цимлянск	1896	Новочеркасск	
59		②			ia	ドニエーブル	Черкассы	Хмельная	Терещенко	Киев	
60		②			ia	ドニエーブル				Днепропетровск	
61		②			ia	ドニエーブル			Ханенко	Киев	
62	4	② 12-1	II A		ia	北カフカス	Терек	Кобан	Chantre	Saint German	
63	5-3	② 18-2	II A		ii	北カフカス	Терек	Кобан	Ольшевский	Эрмитаж	
64	5-1	② 18-1	II A		ii	北カフカス	Терек	Кобан	Уварова	Москва	
65	5-2	② 18-3	II A		ii	北カフカス	Чегем	Нальчик		Эрмитаж	
66		② 13	II B		ib	北カフカス	Берая	Майкоп	Запоржский	Эрмитаж	
67		② 15	II B③	円盤	ib②・ii	北カフカス	Берая	Майкоп		Краснодар	
68		②12-3~5	II B		ii	北カフカス	Терек	Кобан	Chantre	Saint German	
69		②	II B		ii	北カフカス	Терек	Кобан		Москва	
70		② 2-II 3-5	II B		iii	北カフカス	Побкомк	Кисловодск	Бобринский	Эрмитаж	
71		② 14-1	II B			北カフカス	Берая	Майкоп	Караетова 1916	Эрмитаж	
72		② 14-2	II B	円盤		北カフカス	Берая	Майкоп	Веселовский 1914	Эрмитаж	
73		② 3-2			ib	北カフカス	Туков	Ханск		Майкоп	
74		②			ii	北カフカス	Чегем または Баксан		Zichy	Budapest	
75		② 22	III		ii	北カフカス	Кубань		Веселовский	Эрмитаж	
76		②	III		ii	ドニエーブル		Южной России			
77		① 7	III②		iii	北カフカス	Кубань	Казанская		Ставропол	
78		② 19-2	III		iii	北カフカス	Терек	Кобан	Ольшевский	Москва	
79		② 19-3	III		iii	ドン・ドネツ	Славносебск	Камышеваха 256	Бранденбург 1892	Москва	
80	7	② 19-1	III		iii	ドン・ドネツ	Донец	Изюм	Городцов 1901		
81	12-2	② 23	III		iii	ドニエーブル		БольшаяБелозерка	Забелин 1868	Эрмитаж	土器
82		②	III		iii	ドニエーブル	Смела	Тенетника 183	Бобринский	Киев	

83	② 24	Ⅲ	iii	ドニエーブル	Черкаassy	Жаботин 542	Бобринский	Эрмитаж
84	⑩ III・IV	Ⅲ③	iii	ドニエーブル	Сула	Старшая 1		Москва
85	⑩ XXXV	Ⅲ	iii	ドニエーブル	Сула	Волковцы 8		
86	⑩ XX	Ⅲ	vi	ドニエーブル	Сула	Аксютинцы 2		
87	②	Ⅲ		北カフカス		Кабарда		Ставрополь
88	② 20	Ⅲ⑤		北カフカス	Берая	Костромская		Москва
89	② 21	Ⅲ③		北カフカス	Берая	Келермес		Эрмитаж
90	②	Ⅲ⑥		北カフカス		Ульский Аул		Эрмитаж
91	②	Ⅲ		北カフカス		Бубан		Краснодар
92	②	Ⅲ		北カフカス				Эрмитаж
93	②	Ⅲ		北カフカス				Леннград
94	②	Ⅲ		ドン・ドネツ	Копёр	Славская		Харьков
95	②	Ⅲ④		ドン・ドネツ				Новочеркасск
96	②	Ⅲ		ドン・ドネツ				Изюм
97	②	Ⅲ		ドニエーブル	Черкаassy	Смела 付近 2	Бобринский	Киев
98	⑩ 9	Ⅲ		ドニエーブル	Черкаassy	Смела 付近 15		Киев
99	②	Ⅲ		ドニエーブル	Черкаassy	Мокневка 460		Эрмитаж
100	②	Ⅲ		ドニエーブル	Канев	Емчиха 373	Бранденбург	Эрмитаж
101	②	Ⅲ		ドニエーブル	Канев	Берестяги 6	Зноскоборов	Киев
102	②	Ⅲ		ドニエーブル	Канев			Киев
103	②	Ⅲ		ドニエーブル	Мелитополь	Константиновка 2	Граков 1949	
104	②	Ⅲ		ドニエーブル	Чигирин	Оснтяжка 471		Эрмитаж
105	② 2-III	Ⅲ		ドニエーブル	Киев	Черняхов	Терещенко	Киев
106	②	Ⅲ②		ドニエーブル	Ромен	Поповка 8	Мазаракн	Киев
107	②	Ⅲ③		ドニエーブル			Жевакова	Днепропетровск
108	②	Ⅲ		ドニエーブル			Бобринский 1940	Киев
109	②	Ⅲ		ドニエーブル			Рабинович 1940	Киев
110	②	Ⅲ	vi	北カフカス	Чегем		Мимера	Москва
111	②	Ⅲ⑤	vi	北カフカス	Берая	Келермес	Шулц 1903	Эрмитаж ③
112	②	Ⅲ	vi	北カフカス			1904	Манкоп ①

番号	挿図	典拠	轡の型式			出土地			発見者・年度	所 (博 物 館)	伴出遺物
			銜	引手	鏝	地 方	河川・都市	遺 跡			
113		②	Ⅲ		vi	ドニエーブル	Черкаassy	Мокневка 453	Бранденбург	Эрмитаж	
114		②	Ⅲ		骨	ドニエーブル	Черкаassy	Гуляй-Города 38	Бобринский	Киев	
115		②	Ⅲ		骨	ドニエーブル	Смела	Таклино 346	Бобринский	Киев	
116		②			iii	北カフカス	Терек	Кобань		Москва	
117		②			iii	北カフカス	Побкмок	Кисловодск	Бобринский	Эрмитаж	
118		②			iii	北カフカス					
119		②			iii	ドン・ドネツ		Арчадинск		Новочеркасск	
120		②			iii	ドニエーブル	Канев	Емчиха 375	Бранденбург 1896	Эрмитаж	
121		②			iii	ドニエーブル	Канев			Киев	
122		②			iii	ドニエーブル	Переяслав	Прохоровка	Хвойхи	Киев	
123		②			iii	ドニエーブル	Черкаassy	Хмельное		Киев	
124		②			iv	ドニエーブル	Ромен		Бобринский 1940	Киев	
125		⑩ XIX	Ⅲ (鉄)		vi	ドニエーブル	Ромен	Аксютинцы 3	Мазараки 1886		
126		⑩ XLVIII	Ⅲ (鉄)		vi	ドニエーブル	Сула	Луки	Плескач		
127		⑩ XX XIX	Ⅲ (鉄)			ドニエーブル	Ромен	Волковцы 495	Бранденбург		
128		⑩ XLV	Ⅲ (鉄)			ドニエーブル		Герасимовка 1	Самоковасов		
129		⑩ XVIII	Ⅳ		vi	ドニエーブル	Ромен	Аксютинцы 6	Мазараки 1886		
130		⑩ XXXV	Ⅳ		vi	ドニエーブル	Ромен	Волковцы 7	Мазараки 1886		
131		⑩ XXXVI	Ⅳ		vi	ドニエーブル	Ромен	Волковцы 2	Мазараки 1886		骨製鏝
132		⑩ L	Ⅳ		vi	ドニエーブル	Ромен	Поповка 1	Мазараки		
133		⑩ L	Ⅳ		vi	ドニエーブル	Ромен	Поповка 5	Мазараки		
134		⑩ L	Ⅳ ②		vi	ドニエーブル	Ромен	Поповка 6	Мазараки		
135		⑩ XII	Ⅳ		vi	ドニエーブル		Солодка 1			骨製鏝
136		⑩ XII	Ⅳ		vi	ドニエーブル		Солодка 2			
137		⑩ XXXVI			vi	ドニエーブル	Ромен	Волковцы 11	Мазараки		骨製鏝
138		⑩ LI			vi	ドニエーブル	Ромен	Поповка 3	Мазараки		
139		⑩ LII			vi	ドニエーブル	Ромен	Поповка 7	Мазараки		

140	㊦ XIV			vi	ドニエーブル	ロメン	Аксютинцы 470	Бранденбург
141	㊦ IX	N		骨	ドニエーブル		Стайки 4	
142	㊦ XIII	N		骨	ドニエーブル	ロメン	Аксютинцы 466	Бранденбург
143	㊦ XIV	N		骨	ドニエーブル	ロメン	Аксютинцы 469	Бранденбург
144	㊦ XXXIX	N		骨	ドニエーブル	ロメン	Волковцы 478	Бранденбург
145	㊦ 19	N		骨	ドニエーブル		Будки	
146	㊦ XXXIV	N		骨	ドニエーブル	ロメン	Волковцы 2	1886
147	㊦ 1-II	N		骨	ドニエーブル	ロメン	Броварки 503	
148	㊦ XIII			骨	ドニエーブル	ロメン	Аксютинцы 467	Бранденбург
149	㊦ XIII			骨	ドニエーブル	ロメン	Аксютинцы 468	Бранденбург
150	㊦ XIX			骨	ドニエーブル		Аксютинцы 2	Мазарак 1886
151	㊦ XXX			骨	ドニエーブル		Басовка Б	Бранденбург
152	㊦ XXXII			骨	ドニエーブル		Провалье 1	
153	㊦ XXXV			骨	ドニエーブル	ロメン	Волковцы 9	Мазарак 1886
154	㊦ XXXVI			骨	ドニエーブル	ロメン	Волковцы 477	Бранденбург
155	㊦ 25			骨	ドニエーブル	ロメン	Волковцы 3	
156	㊦ 2-II			骨	ドニエーブル		Броварки 505	
157	㊦ VII	N		vii	ドニエーブル		Стайки 3	
158	㊦ XXVII	N		vii	ドニエーブル		Басовка 497	Бранденбург
159	㊦ XXVII	N		vii	ドニエーブル		Барзна 1	Антонович
160	㊦ XXXII	N		vii	ドニエーブル	ロメン	Волковцы 1	Мазарак 1886
161	㊦ XLVIII	N		vii	ドニエーブル		Кулешевка 425	Бранденбург
162	㊦ LIII	N		vii	ドニエーブル	ロメン	Поповка 14	Мазарак
163	㊦ 28・30 34・36	N④	環形	vii	ドニエーブル	ロメン	Волковцы 1	Мазарак 1897
164	㊦ 37	N		vii	ドニエーブル	ロメン	Волковцы 2	Мазарак 1897
165	㊦ XXXI	N		vii	ドニエーブル		Борзна 2	
166	㊦ 22	N		vii	ドン・ドネツ		Часть 1	
167	㊦ 22	N		vii	ドン・ドネツ		Часть 7	
168	㊦ 22	N	環形	vii	ドン・ドネツ		Русская Тростянка 7	
169	㊦ 23	N	環形	vii	ドン・ドネツ		Русская Тростянка 17	

番号	挿図	典拠	替の型式			出土地			発見者・年度	所 (博物館)	伴出遺物
			銜	引手	鏃	地 方	河川・都市	遺 跡			
170		㊸ 23	Ⅳ	環形	vii	ドン・ドネツ		Частые 11/2			
171		㊸ 25	Ⅳ②	環形	vii	ドン・ドネツ		Клименковск			
172		㊸ 26	Ⅳ③		vii	ドン・ドネツ		Анновск			
173		㊸ 24	Ⅳ		iv	ドニエーブル		Шумейко			
174		㊸ XVIII	Ⅳ		v	ドニエーブル	Ромен	Аксютницы 1	Мазараки	1883	
175		㊸ XLIX	Ⅳ		v	ドニエーブル		Плавнищи 484		1885	
176		㊸ LVI	Ⅳ		v	ドニエーブル		Хитцы	Плескач		
177		㊸ V			v	ドニエーブル		Станки 2			
178		㊸ XVI			v	ドニエーブル	Ромен	Аксютницы 2	Мазараки	1886	
179		㊸ XVIII			v	ドニエーブル	Ромен	Аксютницы 1	Мазараки	1886	
180		㊸ XXVIII			v	ドニエーブル		Басовка 499	Бранденбург		
181		㊸ XLIII. XLIV			v	ドニエーブル	Ромен	Волковцы 4	Мазараки	1886	

典拠

1. Иессен, 1952—Иессен, А. А., “Некоторые Памятники VIII-VII вв. до н. э. на Северном Кавказе”, *Вопросы Скифо-Сарматской Археологии*, 1952.
2. Иессен, 1953—Иессен, А. А., “К Вопросу о Памятниках VIII-VII вв. до н. э. Юге Европейской Части СССР”, *Советская Археология*, XVIII, 1953.
3. Граков, 1971.—Граков, Б. Н., *Скифы*, 1971.
4. Ковпаненко, 1966—Ковпаненко, Г. Т., “Носачівський Курган VIII-VII ст. до н. е.”, *Археологія*, XX, 1966.
5. Гриневич, 1951—Гриневич, К. Э., “Новые Данные по Археологии Кабарды”, *Материалы и Исследования по Археологии СССР*, 23, 1951.
6. Джапаридзе, 1953—Джапаридзе, О. М., “Бронзовые Топоры Западной Грузии”, *Советская Археология*, XVIII, 1953.
7. Тереножкин, 1955—Тереножкин, А. И., “К Вопросу об Этнической Принадлежности Лесостепных Племен Северного Причерноморья в Скифское Время”, *Советская Археология*, XXIV, 1955.
8. Мелюкова, 1958—Мелюкова, А. И., “Памятники Скифского Времени Лесостепного Среднего Поднестровья”, *Материалы и Исследования по Археологии СССР*, 64, 1958.
9. Ильинская, 1957—Ильинская, В. А., “Памятники Скифского Времени в Бассейне р. Псёл”, *Советская Археология*, XXVII, 1957.
10. Ильинская, 1968—Ильинская, В. А., *Скифы, Днепровского Лесостепного Левобережья*, 1968.
11. МАКАРЕНКО, 1930—МАКАРЕНКО, Н., “La Civilization des Scythes et Hallstatt”, *Eurasia Septentrionalis Antiqua*, II, 1930.
12. Либеров, 1965—Либеров, П. Д., “Памятники Скифского Времени на Среднем Дону”, *Археология СССР, Свод Археологических Источников*, Д1-31, 1965.

(編者不明)

The Monastic Movement of Lérins: The Attitude of
the Gallic Senatorial Aristocracy Outstanding in
the Religious World in the 5th Century

by

T. Yoneta

The particularistic tendency of the Gallic Episcopate, which had become more and more conspicuous in the Arian Controversy from the late 4th century onwards and had intended to establish in Gaul a united body which clarified its original tradition and its own opinion, got actualized through the first half of the 5th century and further brought an important change in quality within the Gallic Church (ECCLESIAE GALLIARUM vel E. GALLICANAE).

In this article, I tried to grasp the change as a break from a negative "body" to a positive one of the Gallic Church with the 430's as a turning-point, and to trace the cause of this change to the Monastery of Lérins which was rapidly extending its influences mainly in the southeast Gaul in those days and to the solid body of the prelates from the Senatorial Aristocracy concentrating in this Monastery.

The Monastery of Lérins was the ecclesiastical base of the Gallic Senatorial Aristocracy who were aiming at the accomplishment of a consanguineous body in the religious world as well as in the secular world through the medium of an exclusive succession of the episcopate.

Therefore, the course of the change in quality within the Gallic Church caused by those forces corresponded with the tendency of the whole Gallic Senatorial Aristocracy in those days.

The Genealogy of the Scythian Bridles

by

T. Yamamoto

The scythian bridles found from northern and eastern regions of the Black Sea are typologically divided into several groups: bits can be

classified into five types (I, IIA, IIB, III, IV) and psalia into eight types (ia, ib, ii~vii) and bone. A part of III and the all of IV, vi and vii are made of iron and the rest are made of bronze.

Typological differences among these groups can be understood as the result of the transitional change. The typological change of the bridle, the association of bit and psalia, can be set up as follows: I + ia → IIA + ia · ii → IIB + ib · ii → III + iii · vi → VI + vi · bone → IV + v · vii.

According to the typological classification, the author intended to establish the chronology of the scythian bridle. Consequently types I, IIA and IIB belonged to the Pre-scythian Period (9th~7th century B. C.), type III to the Early Scythian Period (6th c. B. C.) and type IV to the Middle Scythian Period (5th~4th c. B. C.).

Main objects of the Scythian culture, such as adzs, swords, arrow heads, pottery and animal style, have been known to have transitionally changed in accordance with each period. Therefore, the scythian bridles can be seen to have a co-relation with other objects. The fact that the set of the objects including bridles had been changing their style as the time went by shows not only how the Scythian culture originated and developed, but how far and how strongly its influence expanded to the east. In Tagar and Ordos culture, the set of the objects including scythian style bridles, types I and III, emerged simultaneously showing deep scythian influence.